

創立 60 周年紀念誌

60th

三多摩青年合唱團

あいさつ

団長 竹澤まみ

三多摩青年合唱団（以下三青と略す）は1963年3月31日に創立し、昨年の2023年60周年を迎えました。60周年を迎えるにあたり、どんな60周年にしようかと団員の中で話し合いをしました。「盛大にレセプションをしたい」との声もありましたが、話し合いをしていた頃は、まだコロナで世の中が落ち着かない時でもあり、「三青の60周年を記念誌として残そう」ということになりました。

古い写真を引っ張り出し、ここに寄せられた文章に目を通しながら三青の辿ってきた道のりを感じています。ここには私の知らない時代の『三青』と、ちょっと破天荒で愛すべき先人たちの生き生きとした姿が見えてきます。「誰もやったことのないことを！」と模索し、平和を愛し歌い続けてきた三青の歴史は、「さあ、これから何をやりたい？」「何をしなければいけないのか？」と私たちに問いかけている気がします。

ここからは私たちが『三青』の歴史を積み重ねていきます。「青年」の名に恥じぬ歌と心意気で、前に進んでいきたいと心から思います。

記念誌作成にあたり、今まで三青に関わっていただいた多くの方々に原稿をお願いしました。どの方もお忙しい中、快く原稿を寄せていただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。

語り継ぐ団の歴史

～～～音楽を中心にした～～～

教育者 峯崎りみ

1963年に創立された三青は昨年60周年を迎えました。これまでどれだけの人たちが団に身を置き、道なき道を眼前に見ながら、それでも希望を持ちつづけて突き進んできたことだろう。60年の歴史を振り返るとき、平和への想いを絶やさずに繋いでくれたたくさんの先人たちのことを思います。

私が入団した1969年頃、練習場の和光保育園のだるまストーブを何人かで囲んで、「団員が増えない…どうしようか・・・」としょぼんとしているときもありました。でも、先人たちはいつのまにか立ち上がり、いつも外に向かって解決策を打ち出していました。

これから書くセクションの一つ一つは、どのセクションにも語りつくせないほどたくさんのドラマがあり、それを簡単にまとめることは容易ではありませんでした。2001年から2020年までの記述は主に、委嘱作品がどのようにして出来たかを記しました。これから合唱団を担っていく人たちの参考になればと思います。

◆ 1970年から独自の研究生制度を設ける（2014年の44期研究生まで続く）

約1000人が約8ヶ月の研究生を修了していきました。

アコーディオン奏者で作曲家の青山義久氏は、20年間くらい作曲や様々な曲のアレンジ・研究生の創作活動そして練習でも週1回はアコーディオンの伴奏で練習するなど、共に歩いてきた、なくてはならない大切な方でした。

◆ 1972年 三多摩「第九」演奏会を始める（2001年の第30回まで続く）

創立団員でもあり、当時の団長の斉藤良三氏と外山雄三先生とは太いパイプがあり、第1回目から外山先生に相談をしながら実行委員会を中心に進めていきました。

指揮者・ソリスト・オーケストラはプロで、毎年250名の合唱団員を募集し、毎週1回4か月の練習を組んで演奏会を開きました。

◆ 1972年 歌劇「沖縄」を三多摩で上演

日本のうたごえ20周年を記念して創作された歌劇「沖縄」は安保廃棄・沖縄全面返還を掲げて集団創作されました。沖縄の伊江島で実際に起こったアメリカ軍の土地収奪に対してたたかう沖縄・伊江島の人々を描いた作品です。

歌劇「沖縄」を成功させる三多摩実行委員会を作り、歌い演じ、チケット売りまで責任をもって成功させました。この時に指揮者としてお世話になった守屋博之（元関西合唱団指揮者）さんとはその後長い間、客演指揮や指揮法の勉強会等々大変お世話になり、三青の礎を築く大きな力になりました。

◆ 1974年に創作ミュージカル「ヒステリータイムス」を公演

（中野サンプラザ、読売ホールなどで計8公演行う）

ある自動車工場で本当にあった出来事を題材にして団員の塚野尤次が台本を書き、作詞・作曲も創作グループで3年がかりで創った大作でした。演出・振付・舞台制作のそれぞれに専門家の協力をいただいて完成させ、公演は大成功で、追加公演が行われました。

◆ 1963年～1995年の約30年間は外山雄三先生に協力を仰ぎながら、委嘱したりコンサートをいっしょに作ったりしてきました

外山雄三先生とは、オペラ「カルメン」を山田洋次・朝間義隆演出で公演、カルメン役は成田絵智子、たばこ女工や闘牛場の観客役などは三青が担当し、合唱で出演しました。

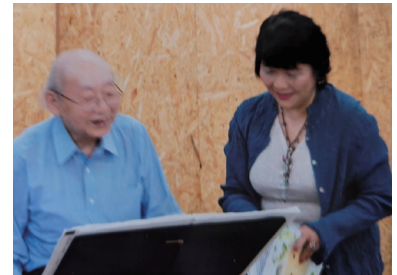
オペラ「たたかわなかつた兵士の話」朝間義隆脚本・演出や「人類のあたらしい規則」を委嘱（大阪のフロイデ合唱団との共同委嘱）被爆・戦後30年40年50年の節目にオーケストラ付きで演奏会を開いてきました。「永遠のみどり」「みどりの炎」「人類のあたらしい規則」など。



◆ 1976年 林光さんを迎えコンサート その後計4回のコンサートを一緒に作ってきました。

1976年「愛・祖国・パン」 1983年「人と天のうた」 2004年「生命の木 空へ」、2008年「六月のバラ」この間、「告別」「自由の木」「夜明けの愛のうた」「チェコマンダンテ」「灼ける渴き」「欠陥」「いつ?」「雨よ降れ」「七月」を三青のために作曲していただきました。

林光さんは「はじめて出会った、労働者の合唱団と、ひとりの作曲家が、短期間の、だが徹底した協働作業から、どれだけのことをひきだせるかという、試みだった。練習のあいだじゅう、私たちは互いに教えるものであり、同時に教えられるものでもあった」というメッセージを1976年の「愛・祖国・パン」のプログラムに寄せていただきました。



◆ 1981年から三多摩26市5町1村全市町村 あめあがりコンサート始まる

これは団員が1人、2～3人と組を作って各市町村へ出向き、つてのないところをつながりを探し出し、コンサートの出来る会場探しからチケット売りまで責任を持つという凄まじい取り組みで、1年半かけてやりきりました。

この形態のコンサートはその後ずっと続きました。

◆ 1993年 団創立30周年で国立市に練習場「さんせいホール」完成

出資金900万円を募り、残りの1500万円をいろんな方に呼びかけて集めきりました。完成記念に府中のウイーンホールで招待コンサートを開催。外山雄三先生や大阪から守屋博之さんもお祝いに駆けつけてくださり、団員の家族や募金して下さった沢山の方たちとみんなでお祝いをしました。さんせいホールのグランドピアノは外山先生と三多摩第九の有志、カトリア会（競輪場に働く婦人たちのコーラス）から贈られたものです。

☆ 創立から約20年間、三青を指導してこられた渡辺昌子さんは、途中で三青を離れ、後に絹の道合唱団を創設されて現在に至っています。渡辺昌子さんが三青の教育者として、オルガナイザーとして果たした力は大きく、足跡を残しました。

この間も「あめあがりコンサート」は毎年続けられましたが、毎年コンサートはするものの、だんだん規模も小さくなり、規模を小さくしてもチケットが売れないという時期が続きました。

そんな時、Tokyo Cantat への出演依頼が飛び込んできました。この出演をきっかけに団は大きな転換期を迎えることになりました。

◆ 2001年5月 Tokyo Cantat に出演

中央合唱団と三青に演奏依頼があって単独演奏と中央合唱団との合同演奏、そして栗友会の若手ユースクワイヤと合同で、組曲「砂川」を栗山文昭先生の指揮で歌うという夢のような機会が訪れました。

栗山文昭先生と言えば全日本の合唱コンクールで出場した7つの合唱団全てで金賞をとったという合唱界のレジェンドですし、その指導が本当に素晴らしかったです。

芥川也寸志作曲の組曲「砂川」は、立川市の砂川の在日米軍立川飛行場の拡張に反対した砂川闘争を題材にした曲ですから、『こんなチャンスはない！チャンスの前髪をつかめ!!』と早速、栗山先生に頼み込みました。その年の11月に予定していたコンサートを「砂川」をメインにすることに決めて、「砂川を歌う合唱団」を公募して、府中のドリームホール（2000名）で栗山先生を客演指揮にお招きして開きました。

◆ 2005年 被爆・終戦60年記念委嘱作品

「ふるさとの風に」竹内浩三作詩・寺嶋陸也作曲

2005年の委嘱をどうするか悩んでいたとき、「季刊日本のうたごえ」に栗山先生の『うたごえへの提言』が掲載されたことがありました。その中に「竹内浩三」と新美南吉作の「ごんぎつね」を推薦してあったんです。それで、すぐに「竹内浩三全集」と池辺晋一郎作曲のオペラ「ごんぎつね」の楽譜を買ってってみました。それまで知らなかった竹内浩三の詩のすばらしさに惹かれて、ぜひ委嘱をお願いしたいと栗山先生に相談したところ、寺嶋陸也さんを紹介してくださいました。

◆ 2006年 委嘱作品「信じる」谷川俊太郎作詩・松下耕作曲

2003年から始まったイラク戦争

2004年にイラクにボランティアで入って活動していた高遠菜穂子さん他2人が誘拐されてしまった「イラク日本人質事件」その日本の誇るべき3人に対して、政府とマスコミが「自己責任論」を振りかざして攻撃するニュースに怒りと悲しみを覚えました。その年のNHKの合唱コンクールの中学校の部の課題曲、松下耕作曲の「信じる」がそのときの想いと重なりました。混声三部合唱だった「信じる」を混声四部合唱にして、是非組曲にしていだきたいと面識もなく、つてもなかったのに、松下耕さんの指揮するコンサートに行くと楽屋に押し掛けたり、耕友会のパーティーに押しかけて何時間も待たせたりして、やっと委嘱を約束できました。

◆ 2010年 被爆・終戦65年記念委嘱作品「骨のうたう」竹内浩三作詩・寺嶋陸也作曲

「ふるさとの風に」を委嘱するときに、私たちの想いの中には竹内浩三の代表作「日本が見えない」と「骨のうたう」のどちらかは選曲されてくるだろうと思っていましたが、なかったんです。でも、寺嶋さんが選んでくださった詩は戦時中であって、生き生きと描かれた青年の心の機微が痛いほど伝わってきて、かえって悲しみが募る素晴らしいものでした。

2007年に寺嶋陸也作曲「沖縄のスケッチ」をコンサートで歌ったとき、寺嶋さんが聴きにいらして下さって、打ち上げの後、家まで送って行ったんです。その時に車中で『骨のうたう』を作曲しようと思っているんだよねとおっしゃるので、「ぜひ、2010年の被爆・終戦65年の記念委嘱にさせてください」とお願いして実現しました。これで「ふるさとの風に」全7曲の完成版となったのです。

◆ 2014年 団創立50周年記念委嘱作品「ワクワク」谷川俊太郎作詩・信長貴富作曲

栗友会の男声合唱団「KUUKAI」の演奏会「ひとりぼっちのクリスマス」をXmasイヴに何人かで聴きに

って、とっても楽しくて素敵だったので、こんなイメージで明るくユーモアがあって切なく元気の出る歌を！と委嘱したのが「ワクワク」。しままなぶさんの演出で歌い演じました。そのときの信長さんのメッセージです。

「私たちが歌へと向かわせるものは何でしょうか。歌いたい歌は何でしょうか。・・・愛する人に捧げるバラード？しょんぼりしている自分への応援歌？はたまたニックキあいつへの恨み節？・・・私たちの心を歌に向かわせるきっかけは多様ですが、そのどれもが愛しい日常のそこかしこにあるものだと言えるでしょう。復興への祈りも、そんな日常と同じ地平の上にあるのではないのでしょうか。」

◆ 2015年 被爆・終戦70年記念委嘱作品

「八月の願い」 与謝野晶子作詩・永瀬清子作詩・寺嶋陸也作曲

女の目線で反戦を！と委嘱して、

与謝野晶子から2篇 「歌はどうして作る」「君死にたまふことなかれ」

永瀬清子から2篇 「起てよ！おまえは」「八月の願い」

◆ 2020年「風の旅」 ドリアン助川作詩・寺嶋陸也作曲 被爆・終戦75年

ドリアンさんを推薦してくださり、引き合わせてくださったのは寺嶋さんです。

戦後75年を思い、戦争と平和の視点、環境問題なども含めてと依頼。話し合いを受けてドリアンさんは、「ボクは今生きていることの感慨を風に託そうと思った。いや、風の気持になろうと思った。あらゆる生きものにささやき続けてきた風は、原発事故によって放射性物質をまき散らす風にもなった。その風の物語だ。」と書いてくださった詩は膨大なものでした。それを30分くらいの曲にしなければならないので、大変申し訳なかったのですが、大幅にカットしていただきました。両者とも手抜きのない大作で難曲でしたから練習も大変でした。

そんな折、2019年の暮れから流行り始めたコロナの蔓延により延期せざるを得ず、結果的には約3年歌い込むことが出来、2022年に無事に初演を終えました。

初演された後、広島で、長野で、東京で・・・と風の旅は続いています。

☆ 2010年の合唱オペラ「白墨の輪」の上演や、2019年の林光ソングのステージでこんにゃく座の歌役者・竹田恵子さんや、岡原真弓さんに演出やうたの指導を受け、大きな刺激を受けたことも大切な歴史の1頁です。

☆ 「うたごえ運動」創始者、関鑑子氏のご息女、小野光子先生(声楽家)には、声楽の個人レッスンや、さんせいホールで毎月1回開かれた三多摩声楽講座の常時開催等で、たくさんの団員が学び、貴重なアドバイスをしていただきました。

☆ 2001年に栗山先生に出会って先生のお力をお借りしていろんな方に出会わせていただきました。

2005年から6つの大きな委嘱作品を世に送り出したこともそうですが、「日常の練習をもっと外からの刺激を受けて変えたい」と、栗山先生に相談して指導者に来ていただいたのが秘蔵っ子の赤坂有紀さんです。初めは月1回でしたが、今では常任指揮者になっていただきました。赤坂さんのご指導は、楽譜をあらゆる角度からみて瞬時に解決方法を見付け変化させていきます。良いものを創り出すエネルギーに妥協はありません。とても厳しいです。月に2回、その他に指導者2人(大塚雅仁氏・佐藤伸行氏)をお迎えして、月の6回の練習をお願いしています。この3人に共通していることは声楽のプロフェッショナルというこ

とです。

表現するのにどこまで心を深く真実に豊かに表現できるか、赤坂さんを中心にして3人の指導者のそれぞれのアプローチはみんな違って、みんないいんです。一つの山を登るとき道は幾つもあって、最短距離で行かなければならないとき、遠回りして違う景色を見ながら登るとき等いろいろあると思います。初めのは、発声や曲の解釈でも3人3色でとまどいの声も聞かれましたが、今ではその形態にも慣れてきたようです。

☆ 運動の基礎は歌唱であり、高い意志と訓練がなくては表現できない

*井の中から顔を出して外の世界を知ること为目标に

2001年から20年かけてコンサートや講習会などへの参加をはたらきかけ、参加し勉強する団員が徐々にふえていきました。

☆ ヴォーカルコンサート（団内コンサート）の定着

一人一人の基礎的な音楽的力量をアップするために企画した独りで歌うコンサート（全員参加）です。1999年から始めて24回を重ねました。初めのはそれぞれ好きな歌を歌ったりパフォーマンスの要素が多かったりしたのですが、回を重ねるごとにそれぞれの中に「勉強しなくちゃ！」という意識が芽生え、声楽のレッスンを受ける人が増えていきました。

ともすれば、中へ中へと入りがちな運動の中であって、委嘱活動でこれまで触れることのなかった音楽に向き合えたことや、指揮者たちから外の世界の刺激を受けて成長出来ていることは大変貴重なことだと思います。

さいごに団は、音楽を通して一人一人の心をつなぎ、平和を阻むものとたたかい、憲法にあるように、一人一人が生き生きと暮らしていける世の中を創る力になりたい。そのために、一人一人の中にある平和への熱烈な思いが息となり声となり音楽となり、たくさんの人たちの心にとどけられるよう、たゆみなく努力しながら歌い続けたいと思います。



60周年記念誌制作実行委員会